OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	植民地期ビルマにおける「映画とカイン」論争 : 仏教徒カレンの民族的主張とその社会的文脈
Author(s)	池田, 一人
Citation	言語文化研究. 2014, 40, p. 11-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

植民地期ビルマにおける「映画とカイン」論争
―仏教徒カレンの民族的主張とその社会的文脈―

池　田　一　人

Dispute on a Karen Film in Late Colonial Burma: The Ethnic Assertion of Buddhist Karens and its Social Context

IKEDA Kazuto

Summary: This study examines the background of two Buddhist versions of the three Karen history books published in the last decade of British colonial rule in Burma, by focusing on a dispute on the description “savage Karen” that appeared in *Thuriya*, a Burmese newspaper of the day, in the first half of 1929. U Pyinnya’s *Kayin Yazawin* (Karen Chronicle) and U Saw’s *Kuyin Maha Yazawin-dawgyi* (Kuyin Great Chronicle) published in late 1929 and 1931, respectively, are regarded as the first ethnic self-assertions by Buddhist Karens, the ethnically silent section of the population compared with the socially vocal Christian Karens. Analysis on the dispute shows how and why the Buddhists have become ethnically conscious at this point in Burmese history.

キーワード：ビルマ、カレン、民族、歴史観

1. はじめに

ビルマ（ミャンマー）[1] 植民地期末期の 10 年の間に、多数派のビルマ民族に対して最大の少数民族とされるカレンのなかから、初めてのカレン史書が 3 種も出版されている。カレンと言えばビルマの外ではキリスト教徒というイメージが強いが、この 3 種のうち 2 種は仏教徒著者による民族史書であった。一点はウー・ピンニャ（U Pyinnya）によってビルマ語で書かれた『カイン王統史（kayin yazawin）』（1929 年出版）、もう一点はウー・ソオ（U Saw）によってやはりビルマ語で書かれた『クゥイン御年代記（kùyin maha yazawin dojî）』（1931 年）である。加えて 1939 年、キリスト教徒著者のソオ・アウンフラ（Saw Aung Hla）によるスゴー

1）翻字について、ビルマ語は奥平龍二氏考案の方式［The Burma Research Group 1987: 18］、スゴー・カレン語は藪司郎氏考案の方式［藪 2001b: 526-531］を使用する。民族の呼称としては、カレン民族は英語表記から派生した「カレン（Karen）」とともにビルマ語の「カイン（Kayin）」や「クゥイン（kùyin）」、スゴー・カレン語の「プアカニョウ（pgaMkañô）」、ビルマ民族はビルマ語口語体の「バマー（bama）」、同文語体の「ミャンマー（myanmar/Myanmar）」、一般的な日本語／英語名称である「ビルマ（Burman）」など、文脈に応じて使用する。領域や国の名称としてのミャンマーとビルマも同様である。（国民としてのビルマ人は Burmese の英語表記が一般に使用される。）本稿の論旨のうえでは各名称の相違は大きな問題とならないので、とくに注記をしないかぎり各々を互換可能な名称として使用する。

・カレン語の『プアカニョウの歴史（pgaMkaňô ali’M taLciFsoMtêsoM）』が出版された。おのおののタイトルに現れる、「カイン（kayin）」と「クゥイン（kùyin）」はビルマ語での他称、「プアカニョウ（pgaMkaňô）」はスゴー・カレン語での自称と一般的には考えられる語である。

筆者は以前、仏教徒のカレン史2点にあらわれた主張と論理を検討し［池田 2009］、キリスト教カレン史をカレンという民族に関する知識の形成過程の上に位置づける試みをした［池田 2012a］。本稿では、仏教徒著者による2点のカレン史が書かれた社会的背景と理由を、1929年前半にビルマ語全国紙上で展開されたある論争を題材にして論ずることを目的とする。

カレンがビルマ世界の外部に知られるようになった理由の一つには、米国バプティスト派がビルマのカレンにおける宣教によって、米国海外宣教史上最初で最大の成功を収めたことがある。これ以来、カレンはなによりもキリスト教徒であるという印象が外部に流布した。ビルマ世界内部で積極的にカレンを標榜した当事者もまたおもにキリスト教徒であり、これらの「カレン」のあり方を標準として、やがてカレンと言えば「キリスト教徒」、「親英」かつ「反ビルマ民族」、ビルマ独立後にあっては「分離主義的」な人々というイメージが定着した。

だが、カレンと呼ばれる人々のうち大多数（1931年国勢調査では77%弱）は仏教徒である。これらの人々の側から「カレン」という人々を再定義すると、そのイメージとビルマ史におけるカレンの意味合いは大いに違ったものになるのではないか。しかしその一方で、圧倒的な多数派であるはずの仏教徒は、なぜ少数派（同16%弱）のキリスト教徒の発する「カレン」の定義に異議申し立てをしなかったのか。仏教徒独自の民族的主張の記録は、いつまでさかのぼれるのか。このような問題意識のもと浮上してきたのが、冒頭にあげた1929年出版のウー・ピンニャ著『カイン王統史』と1931年のウー・ソオ著『クゥイン御年代記』であった。これら2書は、「カレン」に関する名乗りの歴史の上で最初の仏教徒による民族的な自己主張の記録であるからだ。

ふたりの仏教徒著者が著書をとおして主張したかったのは、カレンという存在がビルマ世界の一角を占める正統な民族、ビルマ語では「ルーミョウ」であるということにあった。この正統性の証明は、ビルマやモンなど他の仏教的王権が存立してきたビルマ世界において、カレンもまた同様の仏教（タータナー）[2)]を信奉する王権（ミン）を過去に保持していた民族（ルーミョウ）であるという論理によって完遂されるべきものであった。これは、ビルマ語で書かれたカレン史書を読むビルマ語話者にとって、ルーミョウの正統性の主張がそのようなタータナー＝ミン＝ルーミョウ関係によって支えられてこそ説得性をもつものであったということだ。

他方、ふたつのカレン史の主張と論理の検討からは、同じルーミョウでありながらキリス

2）「タータナー（thathana）」はパーリ借用語で第一義的に「（仏陀の）教え、教義、教説」［大野 2000:710］、「清教」つまり「清浄なる教説」［奥平龍二氏のご教示による］の意で、仏教を内在的・絶対的な観点から表現する文脈で使われることが多い。仏教（ボウダ・バーダー）、キリスト教（カリヤン・バーダー）、イスラム教（ムスリム・バーダー）などと並列的に言及し、相対的な観点から「宗教」を意味するビルマ語の語彙「バーダー（badha）」とは区別される。

ト教徒のカレン同胞へ顧慮が払われないこと、この 1920 年代から 30 年代という時期にようやくに、仏教徒カレンが民族として自己主張をはじめた理由などがまだ分からなかった。

本稿では以上のような疑問に答えるべく、ビルマ語全国紙トゥーリヤ（Thuriya 英語名"Sun"）紙上で争われた「映画とカイン」を主題とする論争の経緯と背景を検討する。この論争では、ある映画においてカレンが野蛮なルーミョウとして描かれたことに抗議する投書が掲載されたことをきっかけに、カインが野蛮であるか否かが議論された。論争の中盤に『カイン王統記』著者のウー・ピンニャが登場し、論争に決定的な方向性を与えていくことになる。そして直接的にはこの論争を契機として、ウー・ピンニャは自身の著書を出版することになった。以下ではまず、ウー・ピンニャとウー・ソオが自身の著書を執筆した動機を再確認したうえで、「映画とカイン」論争の展開を検討したい。

2. 仏教カレン史 2 書の執筆動機

ウー・ピンニャは、下ビルマ南東部の地方都市タトン出身の作家であった。『カイン王統史』は、ビルマ世界では伝統的な歴史叙述のスタイルである王統記／年代記の形式を踏襲しているが、その内容はカレン／カインという民族を主人公とした民族史である。カインはモン・カイン、ミャンマー・カイン、シャン・カインと 3 種に分類され（後述）、それぞれ同名の民族に直近の祖がある。わけても著書ではモン・カインのふたつの王統が記述の中心となるように、ほかの民族にもましてモン族との歴史的親密さが強調されている。序言では「カイン・ルーミョウの誇り（zatìman）を称揚し、繁栄を築かんとするために、またその王統記を追究する聖俗とわぬ人々の知識の拡充に資する」［Pyinnya 1929: 1-2］ことが執筆の目的であったことが明らかにされ、過去におけるカイン王統の存在証明が本書の最大の関心であることが開陳されている。これにこだわる理由が『あとがき』の項に明らかにされている。

7 ページ半にわたる『あとがき』の前半 3 ページ半はまず、ウー・ピンニャの『カイン王統史』に骨格と詳細の典拠を与えたという「パオ語で書かれたカイン王統記文書」［詳しくは池田 2009:89-90］に、1908 年に偶然行きあたって翻訳した経緯が詳しく述べられている。そして一連のエピソードを詳述したのち、本書で参考にした 26 の文献について概説する直前に以下のように記す。

> くだんの（パオ語で書かれた）『カイン王統記』は 20 年ばかり使う当てもなく置かれたままであったが、（緬暦）1288（西暦 1926）年ころになってからようやくに、カイン・ルーミョウが民族精神の覚醒を得て（nôucâ htàkwà shì）、カイン王統史を望む声が上がっていることを知り、最近になってモーラミャインのチャンキン僧院にてガナワサガァの（称号を持つ）学識深き僧正でカイン・ルーミョウであられるオウッタマ師がお尋ねになられ、

1270（1908）年に書写したカイン王統記があったはずとおっしゃられ、僧正の勧奨を受けて僧正とともに、ナウンダマン師、ミャパタイン師、イエーブー師、ナウンロン在のミャペー師、古都ドーンイン近在タンクウェ村の僧正などのカイン・ルーミョウの僧正らとともに議論を重ね、このカイン王統記文書をもとに、以下に記したもろもろの文書に照会し、欠落を補い、さらなる検討を重ねて執筆したのである。［*ibid*.: 174］

もろもろの運動や精神の高揚が往々にしてその主体の否定や批判から始まることを考えれば、「1926 年ころに」カインがルーミョウとしての何かを社会的に批判され否定されていたがゆえに、「民族精神の覚醒」を見たことが容易に想像されるだろう。それに対する反論としてカインに仏教的伝統に連なる王統があったことを主張しているならば、当時カインは王統がなく仏教徒としての資質に欠ける、仏教徒としては二流三流の人々という蔑視が広く存在していたと解釈できる。つまり、カインという集団がビルマの仏教世界で周辺化されつつあるという危機感と反駁のために、ウー・ピンニャがこの書を書いたと考えるのが妥当である。仏教徒としての資質に欠けた人々、という批判がカレンの史書執筆動機になっているという点は、ウー・ソオの著作においてより鮮明にうかがい知ることができる。

ウー・ソオは、ラングーンの総督府の翻訳部門にパーリ語翻訳官として勤務していた公務員であったと、その著書表紙に紹介されている。ウー・ピンニャとは異なりカレンの過去を細部をもって語る根拠資料をもたないために、『カイン王統史』と比べてウー・ソオの記述は具体性の欠けた平板な印象を受ける。ミャンマー領域の全民族は古代インドのコーリヤ族に起源があり、その入緬ののちピュウ・カンヤン・テッという 3 民族に分化し、カンヤンこそカレン／クゥインであったと説明される。クゥインの名はインド古代の王インクーラから譲り受けたため、カイン（Kayin）の第一音節の母音を u 音で表記してクゥイン（Kuyin）とするのが正式であるという[3)]。ウー・ソオの最たる主張もまた、過去にクゥインが釈尊の教えを奉じた王統によって民族が統治されていたということである。ウー・ピンニャの書物出版の 2 年後にウー・ソオは本書を出版しているが、『カイン王統史』の存在を知らなかった。それでも一連の叙述のしめくくりで、以下のように述べる。

いまの時代、クゥイン・ルーミョウは森や山、河川の砂洲、島などに広く暮らしており、他のルーミョウとの交わりがなく、むしろその交わりを避けていたので、交流の経験もいよいよ少なくなって、他民族によって野蛮な（ayâin asâin）気質の人々だと決め付けられ、交際仲間もなく、くに（naingan）のうちでもその一員として認められず無視され、それ以来ながきにわたって交わりもなく、国もメンバーにも入れてもらえず無視され、無関心の対象とされ･･･（中略）･･･しかしながら実際は、クゥイン・ルーミョウの本源大本の

3）綴りは Kuyin でも実際の発音は、Kayin と同様だったと思われる。詳しくは［池田 2009: 131］を参照。

祖をたどれば信（tha’da）、戒（tilà）、智（tùtà）、行（zagà）などの徳を備えた人々であったのであり･･･（中略）･･･“川の流れが砂の堆積によって消えるようには、民の流れは消えないものである”と、その昔、学識深き人々が言われたように･･･（中略）･･･民の本源・来し方を知るクゥインの指導者、統べるものたちはそれを決して忘れることなく、民族の尊厳精神を宣揚護持すべし（wùnthanù re’hkità）･･･［Saw 1931: 184-185］

このように、クゥインは辺境の「野蛮な」ルーミョウとして見られてきたが、仏教徒としての徳・資質は人後に落ちない、したがってクゥインの指導者はその精神を回復すべき、という主張が述べられている。ウー・ソオの執筆動機の背後にもウー・ピンニャと同様の危機感があると読むべきであろう。

ところで、ウー・ピンニャの執筆動機に暗示され、ウー・ソオには明確に示されているカイン／クゥインへの批判とはどのようなものであったのか。ウー・ピンニャの『あとがき』末尾には、その具体的な様相をうかがい知ることのできる出来事が触れられている。

（･･･このように、カイン王統史を）1289 年ナヨウン月白分 8 日（1927 年 5 月 26 日）に、新たに加筆のうえ完成した。最近のこと、映画（のショー）からはじまり、カイン・ルーミョウには王統がなかったなどなどと論じられてきたが、私の元にカイン王統史があるとトゥーリヤ紙において公表し、書き記したことから、幾人かのカイン・ルーミョウや王統記に関心を寄せる人々ら皆の要望と励ましを受けて、私のところにあるカイン王統史をハンタワディー郡のガマーレイッ僧院住職の僧正とヤンゴン市のアーディッサーワンター師などの僧正にお見せし、校閲を拝したうえで、印刷出版できるだろうとの言を頂戴したので、1291 年ワーガウン月（1929 年 8 ～ 9 月）にトゥーリヤ新聞社にて印刷し、ダディンジュ月（同年 10 月 3 ～ 31 日）のうちに無事完成をみたのである。 ウー・ピンニャ ヤーザウィン・サヤーヂィ（タトン）［Pyinnya 1929: 177-178］

ウー・ピンニャの『カイン王統史』の初稿自体は 1927 年半ばに完成していたが、出版直前の 1929 年前半、「映画（のショー）からはじまり、カイン・ルーミョウには王統がなかったなどと論じられてきた」として、ある種の論争が起こったことを記している。この論争自体が直接、ウー・ピンニャの執筆動機となったわけではないものの、1926 年頃の「民族精神の覚醒」と底流では同一の流れの上に生起していたと考えてよさそうである。以下ではまず、この論争の背景となったビルマの 1920 年代末期の時代的様相を瞥見する。そのうえで論争を取り上げ、そこで何が問題となっていて、どのような展開を見たのかを検討してみたい。

3. 論争の時代背景[4)]

ビルマにおける1920年代末という時期は、英国支配が下ビルマですでに70年以上、上ビルマでも40年以上におよび、その体制の矛盾を内に孕みつつも植民地的安定と繁栄が実感できた時代であった。第二次英緬戦争後にはじまったイラワディ・デルタ開発は、1870年代初めに200万エーカーであったコメの作付面積が1920年代に900万エーカーを上回り、1930年代までにビルマを世界最大のコメ輸出国に押し上げた。このような経済開発は上ビルマからのビルマ農民の流入と南インドからの大量の労働者移入をともなって行われたものであって、その結果として「複合社会」[Furnivall 1956]と評せられる複雑な民族状況をつくりだした。植民地の首都としてのラングーンでも急速に諸種のインフラが整えられ、この数十年の間に都市の相貌を大きく変えた。政治的変化と経済発展そして人口流動などを背景として、ビルマの全面植民地化に先立つ1870年代には植民地的な社会階層の分化がすでに始まり、1920年代にはおおよそ3つの階層から成る社会が出来上がっていた。

特筆すべきは、英人を中心とした支配者や欧米系企業の経営者などを主とするごく少数の特権的階級と、大多数の人口を擁する農民階層のあいだにはさまれた、ピラミッドの中層を構成する中間層の成長であろう。中間層に含まれる人々はおもに都市とその周辺に住む地主や自作農、商人、公務員、弁護士、教師などであり、植民地政府が導入した新しい教育制度のもとで育ち、高校卒業か中退程度の学歴を有するのがふつうであった。彼らは植民地体制を支える重要な支柱であったが、同時に、この人々のあいだから反植民地運動やビルマ民族主義運動を指導する人材も輩出され､そしてそれを支える基盤ともなった。中間層が政治への関心を高め、ビルマが英国の植民地という従属的地位に甘んじている現状に目を向けはじめたのは20世紀に入ってからである。

後にビルマ民族運動の嚆矢として記念されることになる青年仏教徒協会（YMBA）は1906年に設立されている。当初、文化団体として発足したYMBAは、第1次世界大戦中のインドでの自治権拡大運動の影響を受けて急速に政治化していった。1919年のモンタギュー＝チェルムスフォード報告で勧告されていた、現地民が部分的に立法と行政に参加できる両頭制の導入がインドのみに適用されビルマでは見送られたことでYMBAの政治運動はさらに活発になる。そして1920年のラングーン大学ストライキを契機として､ビルマ人団体総評議会（GCBA）に発展的に再編された。また、GCBAの僧侶版ともいえるサンガ総評議会（GCSS）や民族運動に関心を持つ政治僧も幅広い活動を行っており、彼らは都市部の運動を農村部へとつなげる役割を積極的に担っていた。1920年代には農村部にも、ウンターヌ・アティン（愛国主義結社）やブー・アティン（拒絶結社）と呼ばれる組織が広範に展開するようになっていた。

4）以下の概観は主に［Taylor 1987］、［根本 1999］、［根本 2002］などによる。

裾野の広い運動の圧力を受けてビルマでも 1923 年に両頭制は導入されたが、自治権の拡大要求は高まる一方であり、この制度の 10 年後の見直し規定が前倒しされるかたちで 1928 年にインド法制委員会（Indian Statutory Commission）が任命されている。委員長の名を冠してサイモン委員会（Simon Commission）と通称される組織であって、その最大の任務はインドの一州としてのビルマを英領の直轄植民地に格上げすべきか否かという諮問に答えることにあった。「映画とカイン」論争の端が開かれたのは、サイモン委員会が 1929 年 2 月に訪緬し、自治権拡大問題が大きな関心を呼んでいた時分であった。

本稿で検討の対象とする論争が展開されたトゥーリヤ紙でも、この動向は詳しく報じられていた。この新聞は 1913 年に創刊されていて、1930 年には発行部数 2,400 部ほどであった[5]。2,400 部というのはこの時期の英語紙[6]と比べても必ずしも少ないわけではなく、回し読みや読み聞かせ[7]が一般的であったことを考えると、実読者数は発行部数の数十倍以上に及んでいたと考えてよかろう。しかも、世界恐慌の影響からか、この時期の前後にはいくつも発刊されていたビルマ語一般全国紙は、このころにはトゥーリヤ紙を残してほとんどが廃刊されていた[8]。多くのビルマ語読者の目に触れた論争であったろうと考えられる。この論争はもっとも多くの投書が掲載された 1929 年 3 月から 5 月を山場として、11 月の中旬までカインとミャンマーを名乗る 30 人ほどの人々による 40 本前後（判明分は 35 本）の投書と編集者による記事によって議論が交わされた【表参照】。多くの投書には『映画とカイン（you’shin hnìn kayin）』や、それに類したタイトルが付されている。

5）U Thwin や U Pu という YMBA の急進的な会員によって資本金 5 万ルピーで設立され、当初「民族主義的」「急進的」などの評価があったらしいが［伊野 1998: 103］、1920 年代から 30 年代までの政庁の出版物検閲資料では「穏健（moderate）」の評価が付されている。［OIOC: V/25/960/44 Annual Statement of Newspapers and Periodicals published in the Province of Burma, 1926-1940］

6）1930 年に発刊されていた英語日刊紙には、British Burma Advertiser（5,500 部）、Burma Exchange Gazette（3,000 部）、Moulmein Daily News（850 部）、Rangoon Gazette（5,000 部）、Rangoon Market Gazette（100 部）、Rangoon Times（4,000 部）、Times of Burma（900 部）があった。他言語による日刊紙としては、タミル語（3 紙計 5,500 部以上）、ヒンディー語（2 紙計 1,500 部以上）、ウルドゥー語（1 紙 400 部）、中国語（3 紙計 3,150 部）があった。ちなみにカレン語では日刊紙は発行されておらず、スゴー語でキリスト教系の季刊誌（2 誌計 700 部）、月刊誌（4 誌計 9,750 部）、隔週刊誌（2 誌計 1,500 部）、週刊誌（1 誌 100 部）が、同じくポー語でキリスト教系の月刊誌（1 誌部数不明）と週刊誌（1 誌 1,800 部）が発刊されていた。［OIOC: V/25/960/44 Annual Statement of Newspapers and Periodicals published in the Province of Burma, 1926-1940］

7）1930 年頃、「多くの村では、村長向けの官報以外には定期刊行物は手に入らなかった」［伊野 1998: 117］との証言もあるが、それでも時に村民が町に出て新聞などを入手して持ち帰ることはあった。植民地期末期、村民の誰かが町で入手した新聞を村に持ち帰ると、農民たちが寄り集まって、字を読める人に新聞を読み聞かせてもらうことが楽しみの一つだったという。（筆者が 2003 年 5 月、2004 年 2 月、5 月、6 月に行ったイラワディ・デルタのバセイン市郊外やミャウンミャ市郊外、エインメ郡、ワケマ郡の農村部での聞き取り調査による。）

8）植民地期のビルマ語日刊紙は、この前の 1926 年には Burma Herald（発行部数 500 部）、Daily Market Report（500 部）、Friend of Burma（1,000 部）、Rangoon Daily Market Report（500 部）、Wunthanu Thadinsa（1,100 部）、そして Sun（トゥーリヤ紙の英名、3,000 部）が発行されていた。またこの後の 1940 年には、発行部数で目立つものだけ挙げると、Daily Telegraph（1,000 部）、Deedok Daily（5,000 部）、Market Report（3,000 部）、New Light of Burma（18,300 部）、New Mandalay Sun（2,250 部）、Progress（16,722 部）、Saithan（5,000 部）、そして Sun（8,000 部）など多数が発刊されていた。しかし、1930 年に発刊されていたのはこの Sun、つまりトゥーリヤ紙以外に、Lawkasara Daily News（1,000 部）、Market Report（500 部）Rangoon Rice Exchange Report（1,000 部）、Rice and Produce Market Report（500 部）などおおかたが経済紙で、一般紙はほとんどなかった。［OIOC: V/25/960/44 Annual Statement of Newspapers and Periodicals published in the Province of Burma, 1926-1940］

【表 「映画とカイン」論争投書一覧（1929 年）】

月 日	署名	タイトル	立場	備考
1 29	カイン―ナン・セインチィ Kayin－Nan Sein Kyi	ミャンマー映画とカイン民族 myanma you'shin hnìn kayin lumyôu	可	発端の投書。
2 ?	カイン子 kayin kalê	?	可	（未入手）
2 11	仲裁者 hpyanhpyei dhu	映画とカイン you'shin hnìn kayin	緬	ジャドソンへの言及。
3 8	サンダー hsanda	映画とカイン you'shin hnìn kayin	緬	ナン・セインチィの映画名指摘。
3 11	ネーシンネーダウン子 neshin nedâun kalê	?	緬	（未入手）
3 15	仏教徒のカイン bou'dabadha win kayin	カイン民族とチャイッティヨー映画 kayin lumyôu hnìn cai'htîyôu za'gâ	可	
3 16	カイン・ポンヂー Kayin Poungyi	カインとミャンマー映画 kayin hnìn myanma you'shin	可	タライン・カインの文字文学への言及。ピュウソオディィへの初めての言及。
3 20	?	?	?	（未入手）
3 21	ミャンマー子 myanma kalê	映画とカイン you'shin hnìn kayin	緬	
3 21	マウンマウンキン（ネーシンネーダウン子） Maung Maung Khin (neshin nedâun kalê)	ピュウソオディィ王とカイン phyùsôdî mîn hnìn kayin	緬	
3 28	マウンニュン Maung Nyun	カインとミャンマー映画 kayin hnìn myanma you'shin	緬	
4 8	都会の人 myodhâ	論説 amyin hnìn ahtin	緬	トゥーリア紙編集者
4 11	ネーシンネーダウン子 neshin nedâun kalê	タイェーキッタラとカイン王 thayeihki'taya pyi hnìn kayin mîn	緬	
4 13	生粋のミャンマー人 myanma asi'	カインとミャンマー映画 kayin hnìn myanma you'shin	緬	ジャドソンへの言及。
4 13	タトン・ウー・ミャッマウン Thaton U Myat Maung	カイン王統史についてのこと kayin yazawin hnìn sa'hlyînhkyîn acâun	可	ウー・ピンニャの投稿。
4 19	ネーシンネーダウン子 neshin nedâun kalê	?	緬	（未入手）
4 29	シュウェチェインクィン Shwe Khyin Kwin	ミャンマー映画とカイン myanma you'shin hnìn kayin	緬	
5 1	カインの血筋 kayin thwêi	カインの大王統記 kayin yazawin dojî	可	
5 6	?	映画とカイン you'shin hnìn kayin	可	
5 13	カイン女性 kayin amyôudhàmî	カインとミャンマー映画 kayin hnìn myanma you'shin	可	プー・パイッサンへの言及。
5 15	カインの学校教師 kayin câun hsàya	カインの王統記 kayin yazawin	可	カインの王統記出版の要請。
5 16	本物のミャンマー人 myanma si'	映画とカイン you'shin hnìn kayin	緬	
5 17	慈悲の人 Maung Myitta	映画とカイン you'shin hnìn kayin	緬	
5 23	ネーシンネーダウン子 neshin nedâun kalê	ピュウソオディィ王とカインたち phyùsôdî mîn hnìn kayin myâ	緬	
5 24	知りたい人 thîloudhu	カインとミャンマー映画（ピュウソオディィ王について） kayin hnìn myanma you'shin (pyùsôdî mîn acâun)	緬	
5 27	サンダー hsanda	カインと映画 kayin hnìn you'shin	緬	サイモン委員会への言及。
5 28	マ・オウンティン Ma Oung Thin	カイン王統史 kayin yazawin	可	ウー・ピンニャ『カイン王統史』出版の広告
5 31	フラーフラー Hla Hla	カインとミャンマー映画 kayin hnìn myanma you'shin	可	
6 3	ヤンゴン・カイン Yangon－Kayin	カインとミャンマー映画（検閲担当の方へ） kayin hnìn myanma you'shin (hsinzalujîmyâdhò)	可	
7 18	ミャミャ クーティダラナーガラー myà myà kùthìdarà nàgàrà	カインとミャンマー映画 kayin hnìn myanma you'shin	可	カインらの愛郷心の高まり指摘。
7 23	カイン・ポンヂー Kayin Poungyi	ピュウソオディィ王 pyùsôdî mîn hnìn kayin myâ	可	
8 1	アウンマウン Aung Maung	カイン王統史 kayin yazawin	緬？	
8 10	マ・オウンティン Ma Oung Thin	カイン王統史の書籍について kayin yazawin saou' caun	可	
11 2	?	カイン王統史 kayin yazawin	可	
11 10	タトン・ウー・ミャッマウン Thaton U Myat Maung	カイン民族についての覚書 kayin lumyôu hnìn acâun hnìn sa'lyîn hma'thâbwe	可	

出典：TD 29 Jan. - 11 Nov. 1929.

註「立場」欄の「可」はカレン、「緬」はビルマを表す。基本的に投稿の内容からカレン側・ビルマ側いずれの立場を擁護しているかを基準に分類した。

4. 最初の投書

論争の発端は、1929 年 1 月 29 日付けのビルマ語全国紙「トゥーリヤ」に、「カイン―ナン・セインチィ（kayin – Nan Sein Kyi）、ヤンゴン生まれ」との署名による『ミャンマー映画とカイン・ルーミョウ（myanma you’ shin hnìn kayin lumyôu）』というタイトルの投書が、丸 1 ページの紙面を割いて掲載されたことにあった。「ナン」はポー・カレン女性の敬称であるので、彼女もカレンの下位民族集団ポーの出身であったのだろう。その投書は以下のように書き出される。

> 私は諸々の今の時代にいるカインらのようなお人たちのようには腹を立てているわけではなく、英国製の映画を見ることは少なく、我々の国産のミャンマー映画だけを、応援しようという気持ちがあってよく鑑賞しています。そんな中で、ミャンマー映画を見ていて、がっかりすること、悲しいことがひとつあります。それはカインらに関係した映画についてです。
>
> およそ 1 年前に、あるミャンマーの映画社がある映画を上映しました。その映画の中で、カイン・ルーミョウらを根っから野蛮で（yâin sâin）低級な（you’ nyùn）人々として描いて見せていたのです。その映画社は、今のような進歩した時代に、タインインダー（tâin yîn dhâ 土着の民）であるルーミョウのひとつを攻撃して面汚しをさせるような映画を上映するべきではないでしょう。カイン・ルーミョウのあいだに憎しみの感情を植えつけるようなものです。［TD 1/29　ナン・セインチィ］

「ナン・セインチィ」氏が見たという映画のタイトルは、この投書の中では明らかにされていない。しかし、続く他の投書［TD 3/8 サンダー、3/15　仏教徒のカイン］のなかで指摘されているところによれば、それは『タウンナンブゎー（htaunnân bwâ）』『ミャエーイン（myàeiyin）』、『シュウェジョウピュウムーラーケー（shweigyôuhpyu mulahkè）』、『プゥレートゥエー（pùlêthwe）』『ダビンシュウェディ（dabinshwedhî）』、『チャイッティヨー（cai’ htîyôu）』[9] などの映画であったらしい。とくに彼女が批判の対象としている映画のひとつは、2 月 11 日の投稿者であるペンネーム「仲裁者」氏によると、『タウンナンブゎー』であり、この映画で「カイン・ルーミョウを根っから野蛮で低級な人々として」描写していることを問題にしている。「ナン・セインチィ」氏はカレンがインド人や中国人とは異なってビルマのタインインダー、つまり土着の民であることを強調し、そして続ける。

9)『タウンナンブゎー』は「南宮生まれ」の意。王宮において南宮とは正王妃の居所であり、したがって「南宮生まれ」とは王の嫡子である王子を意味する。『ミャエーイン』は女性の名前。『シュウェジョウピュウムーラーケー』はビルマの昔話の題名。『プゥレートゥエー』は「真珠の首飾り」の意。『ダビンシュウェティ』はタウングー朝の王の名で在位 1531 年～ 1550 年。『チャイッティヨー』はビルマ南東部にある「黄金の岩」で有名なパゴダの名称。いずれの映画フィルムも筆者は未見で、ビルマではほとんどが失われてしまっているようだ。

カイン・ルーミョウにはタライン・カイン、ミャンマー・カイン、タウンボー・カインという 3 種がいて、その 3 種の中でタライン・カインとミャンマー・カインの 2 種は、大昔のミャンマーの王様の治世の下でさえも、タラインやミャンマーらと同様に、ミャンマー国の下半分（下ビルマ）で、文化的に（yincê zwa）暮らしてきたということを知るべきでしょう。ですから、これら（2 種の）カイン・ルーミョウらを野蛮だと、実際、まったく言うべきではないのです。タウンボー・カインらはというと、その昔、大昔には野蛮でありましたが、今の時代となってしまってはこのカイン・ルーミョウらも文化的になっていて、今の時代の教育を享受しています。これらのカイン・ルーミョウはひとつの（独自の）言葉を話し、今タウングー周辺に暮らしぶりもよく生活しています。ですから、カイン・ルーミョウをすべてひっくるめて攻撃するのは、まったくするべきではないのです。カインの「ソオケー」や「ソオブゥー」などのことについて（この映画の中で）描くときにも、辱めを与えて笑い種にしてしまおうと工夫して見せているのです。本当のところ、それらソオケーやソオブゥーなどの暮らしていた家だって、ミャンマー・ルーミョウの貧乏な田舎ものたちの住んでいた家よりもずっと良かった、というのは疑いないことですよ。そのむかし文化的であったことと、いま文化的であるということは、どのような点についても異なっているということを知るべきです。文化的であるという意味を理解するために、西洋諸国の知識人たちの書いた書物を読んでみるべきです。［TD 1/29　ナン・セインチィ］

ビルマの外に紹介されるカレンは、ふつうポー（Pwo）とスゴー（Sgaw）を言語的な二大サブグループとして、ほかにも多くの下位民族集団を含む民族であると解説されることが多い［Marshall 1922 など］。しかしこれは、19 世紀のキリスト教宣教からはじまり英植民地政庁のもとで精緻化され、外部世界に伝えられた分類の仕方にすぎない。1920 年代のビルマ語話者は、ポーを「タライン（モンの別名）・カイン」、そしてスゴーを「ミャンマー（バマー）・カイン」と呼び、この 2 種類が代表的カレンであるとしていた。ポーの居住地域がモン族と、スゴーのそれがビルマ族と重なっており近接した関係を保ってきたがゆえに、このような分類と呼称が生まれて、植民地期まではビルマ語話者にはこの区別が一般的であったようである。

さらにここではもう 1 種、英語では「カレンニー」[10] に相当すると目される「タウンボー（山地）・カイン」も第 3 のカレンとして分類されている。植民地期にカレンニー藩侯州（Karenni Native States）として形式的な独立国家の地位にあったカレンニーは、伝統的にシャンの藩王国と密接な関係を保ってきた。したがって、この記事の中でもカインの伝統的首長「ソオケー」、シャンの藩王「ソオブゥー」を戴くカインを、タウンボー・カインとして別個のグループに分けている [11]。

10）自称はカヤーであり、ビルマ語他称ではカインニーで「赤カイン」の意。現在はビルマ語でもカヤーと呼称する。
11）後述するように、ウー・ピンニャの示す第 3 の分類である「シャン・カイン」はこの「タウンボー・カイン」とほぼ同じ対象を示すものと思われる。

「ナン・セインチィ」氏はタウンボー・カイン自体はむかし野蛮であったものの、現代では文化的であり、それ以前にソオケー、ソオブゥーという支配者層はそもそも文化的であったということを主張する。これに対してタライン・カインとミャンマー・カインは、「ミャンマーの王様の治世」の王朝時代に、ほかのモンやミャンマーらと同様に文化的であったとする。さらに「ナン・セインチィ」氏は、「西洋諸国の知識人たちが書いた書物」を証言として引き合いに出すが、これは一般のビルマ語読者もカレンが西洋人とのつながりのある民族とのイメージを持っていることを示唆するものであろう。

さて、近年、他のミャンマーの映画社から上映された映画については、カインらに関係するところをみてみると、まだましでありました。しかしそれについては改善すべき点も多く、まだ良くはなっていません。ですから最近、バインヨウンドォヂー[12]である映画社が上映した映画を思い返してみると、カインらを野蛮である様子で描いています。ソオケーと呼ばれる人たちは王（bayin）と同じように生活していたということを知るべきです。この映画の終わりのほうで、王妃となったカイン・ルーミョウを、その暮らしぶり野卑なように描いておりました。こんなことはすべきではないということを、重ねて注意すべきです。

ミャンマーの映画をカインらはこころよく思わぬこと甚だしく、そのように思わない者は誰もいないくらいだと聞いています。ですから、カインらの敬愛の念をみすみす失わないよう、いまの時代の文化的で上品な、そして進歩的な居住まいのカインらの様子を見てもらい、今の時代発展しているとおりに、カインらのことを文化的だと理解して描いてもらうよう、諸々のミャンマーの映画社の皆さんに、私は礼儀をわきまえて切にお願いするものです。［TD 1/29　ナン・セインチィ］

「ナン・セインチィ」氏の苦言の投書に始まる「映画とカイン」論争は、これ以降いくつもの議論の流れに展開していくことになる。例えば、野蛮であったというのは「事実」に間違いなく、それを捻じ曲げて映画を作るべきではない［TD 2/11　仲裁者］と映画製作の倫理を強調したり、カレンを野蛮と見下すような表現は映画では控えるべきであり、政府はそのような動向を制するべきである［TD 5/13　カイン女性］、ヤンゴン当局の検閲担当部局は取り締まるべきであり、イギリス民族もこの類の中傷は許容しないだろうと英首相ボールドウィンがいった［TD 6/3　ヤンゴン・カイン］など、民族中傷を映画という媒体ですることの是非をめぐる論などが展開されていた。しかし、なんといっても、この論争の核心はカインが野蛮なルーミョウであるか否か、という点にあった。

12）ヤンゴン市内にあった映画館の名前。

5. 3つのルーミョウ

何をもってして「野蛮」となすか、その論理を見極めることに本稿の関心があるが、まずは1920年代のビルマ社会ではすでに民族、つまりビルマ語で「ルーミョウ」が基本単位として構成されていることについて確認すべきであろう。さきに触れたように、論争が行われた時分、ビルマでは両頭制導入をめぐって政治の季節に入っており、英国からサイモン委員会が来緬していた。論争で「野蛮なカインの過去」について論じた「サンダー」氏は、このサイモン委員会の動向に絡めて論評しているが、そこには「ルーミョウ」を意識した時代の空気がよくあらわれている。彼はカイン側論者に対して、以下のように問いかける。

> サイモン委員会の前では、どのルーミョウも民族分離問題（ルーミョウ・クウェチャー・イェー lumyôu hkwêhcâ yêi）について要求していると、新聞を読んでいる人は誰でも知っている。民族分離（問題について）を要求どおり、すべて得ることができるかどうか結果が出れば、ミャンマー・ルーミョウは心のうちでどのように思うだろうか。［TD 5/27 サンダー］

のちの1937年、新しいインド統治法施行により達成された印緬分離は、「サンダー」氏によってここで「民族分離問題」と表現されている。ここで分離（クウェチャー hkwêhcâ）されるべきルーミョウとは、第一義的に帝国インド領に住む人々とその一州としてのビルマの住民という意味であったのだが、その問題の行く末について「ミャンマー・ルーミョウは･･･ どのように思うだろうか」と、カイン・ルーミョウに投げかけるのだ。つまり、大英帝国インドとビルマとの間が「ルーミョウ」という言葉によって隔てられるように、同じ植民地ビルマ内のミャンマーとカインのあいだにも「ルーミョウ」という懸隔が存在している。

このように20世紀初頭、ビルマ社会と世界を理解する普遍的な基本単位が「ルーミョウ」となっていて、この論争でもそれが前提とされている。では、社会の単位としての「ルーミョウ」は、ビルマ語話者の観念の中でどのような存立の論理をもっていて、あるルーミョウが野蛮とされる論理はどのようなものであるのか。

まず野蛮／文明を論ずるにあたって、諸ルーミョウを比較する視点は当初から見られた。西部や北部山地の民族を引き合いに出して、東部山岳地域にも分布するカレンを比較し、「カインはその昔、チンやカチンほどには野蛮ではなかった」［TD 4/13　生粋のミャンマー人］とするのは典型であろう。サイモン委員会に言及した「サンダー」氏は、カレン側のなしたルーミョウ比較で以下のようにビルマ民族が貶められたことに反発している。

> その昔、プー・パイッサンは「カラーはタキン（thàhkin 主人）、カインはパヤー（payâ 仏）、

バマーはアラガー（àlàgâ 役立たず）」と言った［TD 5/13　カイン女性］

プー・パイッサンは、1928 年にロンドンで出版された、キリスト教徒カレンコミュニティの大物であるサン・C・ポー（Sir San Crombie Po）による『ビルマとカレン（Burma and the Karens）』［San C. Po 1928］にも、「カレンの知名の士」として紹介されている宗教者である。さらに、この警句的な表現自体はカレンのあいだにながらく伝わっていた慣用句であったらしく、19 世紀末の英植民政庁の財務長官の地位にあったスミートン（D. M. Smeaton）の著書にも、カレンのいにしえの預言（old prophecy）として、“A foreigner may be a ‘sir’, a Karen a lord, while the Burman is of no account at all (a-la-gà)”と引用されている［Smeaton 1887: 215］。この言い方が流布していたのはバプティストを中心としたキリスト教徒コミュニティであったと推測され、「カイン女性」氏もキリスト教徒だったのかもしれない。これに対して「サンダー」氏はつぎのように反論する。

カラーはラントゥウィン（lânhtwin 開拓者）、カインはランピャー（lânpyà 道案内）、バマーはナンヤー（nân yà 王位を得たもの）［TD 5/27　サンダー］

ここにはカレンへのとりなしと、なおも揺るがないビルマ優位の誇示とが入り混じっているといえよう。

もろもろのルーミョウの比較は、おおかたにおいてカレンが野蛮であったという事実認定を前提としており、このような投書は更なる反論を呼び起こし、論争の炎に油を注ぐことになった。ところでここでは、比較の対象として、「カラー」と「カイン」、「バマー」という 3 つのルーミョウが挙がっていることに注目したい。

「カラー」とはスミートン著書の訳語にもあるとおり「外来者」の意があり、文脈によって「白人」や「インド人」にもなる。植民地期にラングーンはインド系の移民者がその人口の半分を占めるまでに至って、蔑みの感情をこめて「カラー」と呼ばれるようになっていた。「カイン女性」氏の引用では「カラー」を「主人」、「サンダー」氏も「開拓者」と優越的なイメージでとらえていることから「白人」の意味でとらえている可能性がある。しかし、『クゥイン御年代記』のウー・ソオが、インド人を前提とした「カラー」を釈尊誕生地の民族と肯定的にとらえている事例もあり、断定することはできない。むしろことわざや警句の常として、文脈によって多義的な意味を持ちうると解釈すべきであろう。

かりにインド人という意味で「カラー」を捉えて、インド人、カレン人、ビルマ人という 3 つのルーミョウであったとすると、これはそもそも下ビルマの植民地社会でとくに目立っていた、主要なルーミョウであったということができる。ビルマ世界を外から英語ガイドブックによって紹介的に俯瞰すると、そこにはカレンをはじめとして北東部にシャン、北部にカチン、

西部にチンやアラカン、下ビルマにモンなどの少数民族がいて…ということになる。しかし植民地時代のラングーンでは、そこに暮らすものの実感としてビルマ民族以外で目立つルーミョウとなると、まずは圧倒的にインド人とカレン人であった。

インド人は19世紀後半のデルタ開発の際に労働力として移入され、以降、1931年の人口統計［1931 Census］からはビルマ総人口約1,465万人のうち、ビルマ（約860万人）とカレン（約137万人）に次いで約102万人の人口を誇るコミュニティにまで成長していたことがわかる。インド人商人は、1920年代にはデルタで産出したコメのマーケティングと流通をめぐってビルマ人商人と激しく角逐し、1930年代にはラングーンで最大の不動産所有者となり、外国貿易においてもインド系の企業がその額面の半分以上を握るまでになっていた。植民地末期、ラングーンの人口の半数以上はインド人で、ラングーンはまるでインドの街のようであったと言われる［Pearn 1939］。ビルマに土着の人々、つまり「タインインダー・ルーミョウ」にとっては、経済的に優位に立つ「外国人」としてのインド人やヨーロッパ人の存在はそれだけでビルマにおける植民地体制の矛盾として認識され、ことあるたびに批判と憎悪の対象となった。

他方、カレンはタインインダーでありながら、このような植民地体制の恩恵を受ける側の人々という印象があった。それはカレンのなかでもとくにキリスト教徒が、ビルマ人にとっては目につく存在であったからである。投書にも当然、このカレンにおけるキリスト教徒の存在が触れられている。

6. キリスト教徒としてのカレン

カレンをキリスト教の影響下にあるルーミョウであるとする意見は、論争のはじめからよくみられた論調であった。

「仲裁者」氏は1922年出版のThe Karen People of Burma［Marshall 1922］とおぼしき書物の著述を引用している。バプティスト宣教師で人類学者であったハリー・マーシャル（Harry I. Marshall）によって書かれたエスノグラフィーで、カレンを学術的な装いのもとビルマの外の世界に紹介した最初の書物のひとつである。「仲裁者」氏は以下のように論ずる。

> ドクター・ジャドソンがカイン・ルーミョウをキリスト教へと導いたことを説明してある本のなかで、（キリスト教宣教が始まる）西暦1829年にいたるまで、カイン・ルーミョウたちはひとつの（まとまりのある）民族であるということが知られていなかったこと、ミャンマー・ルーミョウたちが野蛮なふるまいをしてきたこと、お金で売買される奴隷という境遇にあったこと、自分たちの子供らが泣くと「ミャンマー・ルーミョウが来るよ」と子供をなだめるようなことがあったことが明確に書いてありますので、カイン・ルーミョ

ウはその昔、（ミャンマー・ルーミョウよりも）劣っていたということは疑うべくもないのです。［TD 2/11　仲裁者］

ジャドソン（Adoniram X. Judson）は、1813 年に来緬した米国バプティスト派の宣教師である。1828 年に最初のカレン人受洗者のコー・タービュ（Ko Tha Byu）を得てから多くのカレン人をキリスト教徒に改宗させたことで知られていたが、これはトゥーリヤ紙のビルマ語読者にも常識的な知識として知られていたことであった。「仲裁者」氏に続くビルマ民族の投稿者も、同じくジャドソンに言及して次のように論じる。

また、「カインたちはずっと昔から文化的であったのだ」と（カイン側の投稿者が）書いていたことについても、もろもろの年代記文書（歴史文書）に書かれていることと矛盾します。カインたちが英国政府の支配を受けて、ジャドソン・カレッジ[13)]を創設した人物であるジャドソンという宣教師が（カレンのあいだに）やってきて説法したときになってようやく、少しずつ開化してきたのだということを知るべきです。［TD 3/8　サンダー］。

また、『カイン王統記』を執筆出版することになるウー・ピンニャがこの論争へ登場する際に、露払い役を引き受けたトゥーリヤ紙の編集者「都会の人」氏もまた、「100 ～ 200 年ほど前に下ビルマでキリスト教宣教師が書いたなかには、カインが野蛮であったと証言する『カトリック・ミッション』という小冊子があった」［TD 4/8「都会の人」］と指摘している。

ここに挙げたいずれの引用においても、第 1 にカレンはキリスト教につながりがあり、したがって第 2 に、かつては野蛮であったがキリスト教によって文明化した民族であるという指摘が含まれる。まずは第 1 の点について、この指摘が当時のカレンのいかなる状況を背景としたものであったのだろうか。

カレンのキリスト教徒が目立つ存在であったことは、植民地政庁の統計の上でも確認できる。カレンはビルマ社会の少数派であるキリスト教徒のなかで 66.08％［1931 Census］の人口を占めて、ビルマにおけるキリスト教徒の代名詞となっていた。カレンにおけるキリスト教徒は少数派で、カレン総人口に占める割合は 16％程度（約 21.9 万人）であったものの、大半を占めるバプティスト（同 12.35％、約 16.9 万人）が社会的におおきな発言力を持っていた。そして、このような存在感あるキリスト教徒カレンの現在の地位がジャドソン以来のキリスト教宣教に由来することは、一般のビルマ人も認識していた。

13）ジャドソン・カレッジ（Judson College）は、1872 年にバプティストによって建学された神学校が母体となっており、1882 年頃にはラングーン・バプティスト・カレッジと呼ばれていた。1894 年にカルカッタ大学より短期大学（intermediate college）、1909 年に 4 年制大学の認可を受けて、名実ともにようやくビルマで最初の本格的な高等教育機関となった。1920 年に国立のラングーン・カレッジと統合してラングーン大学（Rangoon University）に再編成されたが、大学を構成する 2 つのカレッジのうちラングーン・バプティスト・カレッジが 1919 年以降ジャドソン・カレッジと呼ばれるようになった［Shwe Wa 1963: 214-215］。ビルマ人仏教徒はビルマに唯一の大学にある「ジャドソン・　カレッジ」の名を通して、カレンにおけるキリスト教宣教の経緯を理解していた。

さらに、上に引用した「サンダー」氏が「カリヤン・バーダー（キリスト教）の考え方はミャンマー人の考え方とは逆である」［TD 3/8　サンダー］というように、おおかたのビルマ民族仏教徒には異質な宗教であり、なによりも支配者の宗教として反感を持たれることもあった。カレンのキリスト教徒がこのような負の印象を持たれていたのは、さらにふたつほどの理由を挙げることができる。

ひとつ目に、キリスト教徒を中心に植民地軍にカレンが多く登用されていた。もともと植民地軍におけるビルマ民族兵士はごく少なく、1927 年には最後のビルマ民族の部隊が解隊されたばかりであった。相対的に植民地軍におけるカレン、チン、カチンなどの割合は大きくなり、わけてもカレンは重用されているという印象を強くした。第 1 次世界大戦でのメソポタミア派兵が成功して平時体勢に戻ってから、植民地軍の主力現地民部隊であって 3 個大隊が配備されていたビルマ・ライフル大隊（Burma Rifles）の標準的な構成は、カレン中隊 2 個、カチン中隊 1 個、チン中隊 1 個となっており、たしかにカレンが多かった。19 世紀後半より何度かの波を形成して起こった農民反乱や反政庁武装蜂起では、カレン兵を含んだ植民地軍が鎮圧部隊としてたびたび派兵された。政庁側は反カレンの風潮に配慮してカレンの出兵を抑制することもあったが、他方で地元のキリスト教徒カレンのコミュニティが武装した自警団を結成してこうしたビルマ人主体の「叛徒」と交戦することも多かった。このような植民地軍のカレン兵とカレン私兵団の存在は、トゥーリヤなどビルマ民族主義的な新聞として名を馳せていたメディアに批判的に取り上げられていた。

カレンが反感を持たれたふたつ目の理由には、キリスト教を背景としたカレンが植民地社会の中で早くから、旺盛な、そして英国植民地政庁に親和的な政治活動を行ってきたことがある。1881 年、YMBA よりも四半世紀もはやくにカレン民族協会（Karen National Association: KNA）が設立されている。また、ビルマ州弁務長官下の一諮問機関でしかなかった立法参事会にもスゴー・バプティストのサン･C･ポーが議員として加わっていた（在任 1916-1923 年）。1917 年、インドで開かれたモンタギュー・チェルムスフォード改革下の公聴会では KNA がビルマにおけるカレンの権益を代表して、「ビルマはまだ自治を行うだけの状況に至っていない･･･ なぜなら（ビルマは）文明度や宗教、社会的発展段階において互いに異なる多くの人種（races）が混在して」おり、「英政府下でのさらなる鍛錬が必要である」との嘆願書［San C. Po 1928: 66］を提出して、YMBA の反発を買っている。

さらにビルマ州総督クラドックによる改革の際、1920 年にはスゴー・バプティストのシドニー・ルーニー（Sydney Loo Nee）が、ビルマで 2 番目に大きい「人種」集団である「カレンには独立した選挙区が保障されるべき」と主張した。つづくホワイト調査委員会（Whyte Committee of Enquiry）ではビルマ側の反対にもかかわらず、両頭制下の議会で 130 議席中 5 議席が割り当てられている［Smith 1991: 51］。先述のサン･C･ポー著『ビルマとカレン』には、

反ビルマ民族・親英的なキリスト教徒カレンの政治的意見が典型的に表明されている。1920年代の一連の政治状況をキリスト教徒カレンの立場から概観して、「カレンとビルマの間の協力の兆候」［San C. Po 1928: 11-17］に言及しつつも終始、ビルマ民族に対して警戒的であり、結局はカレンとビルマの間の「完全な協力の不可能性」［*ibid*.: 18-21］を論じている。そして、少数派としてのカレンがこれ以上の不利益をこうむることのないように、「民族の切望」としてテナセリム管区をカレンに自治州として割り当てること［*ibid*.: 77-84］を主張している。

このように、1920年代にはカレンのなかのキリスト教徒の存在感はきわめて大きいものであったし、植民地体制を成り立たせている強制装置としての植民地軍で優位な位置を占め、なおかつ政治分野ではとくに親英的な傾向が濃厚であって、カレンは植民地体制の恩恵を受ける「彼らの側の民族」、すなわち「政庁協力民族」であるというイメージはすでに抜き差しならぬほどにビルマ社会に浸透していたと言ってよい[14)]。

7. キリスト教徒という現在、非仏教徒の過去

それでは第2の点、つまりかつては野蛮であったカレンがキリスト教宣教によって文明化されたということは、トゥーリヤ紙のビルマ人読者にどのように理解されていたのであろうか。

外部からビルマ世界を俯瞰する立場からは、英政庁に親和的で「先進的な民族」とのイメージをキリスト教徒カレンに対して抱くかもしれない。だが、この論争に参加した人々が着目する点は少し異なっている。例えば、「ナン・セインチイ」氏と「カイン・カレー（子）」氏につづいて初めてビルマ民族側の論者として登場した「仲裁者」氏は以下のように指摘する。

> 今、大きな権勢を誇る英国人も、昔は野蛮であった。…街中で人力車を引くクーリーから身を起こした（南インドの）テルグ人のある人は、裕福になってから、（クーリーであったことを）考えるたびに腹立たしく、死んでしまうほどに狂おしかったが、…どのルーミョウもどの人も、むかしは貧しく卑しむべき境遇にあった…（ので、）それは今成功した様から見れば名誉なことではないか。…そして今、キリスト教の宣教師が（カインを）育成することによって繁栄し、優勢になってきてミャンマー（・ルーミョウ）と肩を並べるまでに発展したのは、…そもそも自らの出自が卑しく劣っていたということを知っていたからこそである、というは間違いがない。［TD 2/11　仲裁者］

このようにいずれの民族も「昔は野蛮であった」。しかし、仏教徒であるということは以下にあるように別格であるようだ。

14）だからといって、一般的なイメージにあるように、カレン全般が英政庁にほかの民族よりも「優遇されていた」ということにはならない［池田 2012b］。

ミャンマー・ルーミョウは“ビャマ（ブラフマン、梵）・ルーミョウ”から出でた仏教徒で、世界で最も文明的だとする見解があり ･･･ 同じようにカインも自らの民を文明的に見せたいのだ。･･･ よって今、カインらが文明的になったとミャンマーらが言ったとしても、昔野蛮であったことを野蛮でなかったと言いなおすことなどできないのだ。［TD 3/21　ミャンマー子］

ここでは、万物の根源につらなる「ブラフマン・ルーミョウ」の系譜に連なる仏教徒ということが、文明的であることの至高の条件と規定されている。そして、論争に参加した人々、わけてもビルマ側の論者は、キリスト教徒であるということをごく最近になって文明化したという限定的な意味でしか評価していない。対して仏教徒であるということは、時代を超えた普遍的な文明性を保証することになる。カレンというカテゴリー下のサブグループの相違を論じた以下の投書にそれが明確に見て取れる。

…タライン・カイン・ルーミョウとミャンマー・カインと呼ばれるルーミョウは、下ミャンマーとヨーダヤー（シャム）国のくにざかいに住んでいます。タライン・カイン・ルーミョウは自らのソオブゥーやソオケーがいて、ちゃんとした生活を営んできた人々なのであります。この人々は、たいへん敬虔に仏教を信仰してきた人々であります。これらの人々は文芸、経典、僧院、仏塔を大事にしながら生きてきたルーミョウであります。タライン・カインたちが居住してきた土地へ、ユダタン師（yùdàthan ジャドソンのこと）というアメリカの宣教師の先生がやってきて説教をしましたところ（タライン・カインは）受け入れませんでした。タライン・カインの土地へユダタン師が赴いたとしても、酷い目にしか遭わなかっただろうということなのです。でありますので、野蛮であると認知を受けていたミャンマー・カインと言われる人々を、ユダタン師は、たくさんキリスト教へと引きずり込んで行ったのです。でありますので、カインたちはキリスト教徒になったのですが、そうでありますならもちろん、昔から（カインが）文化的だったということを、私だって信じてあげましょうとも！［TD 4/13　生粋のミャンマー人］

最後の一節はもちろん、皮肉である。ここには、そもそも仏教徒＝文明的な人々であるなら、キリスト教に改宗する余地などなく、仏教徒でなかった＝野蛮であった故にキリスト教を受容した、という論理が共有されている。「文明的なキリスト教徒という現在」は、つまり「野蛮な非仏教徒の過去」を意味していた。

8. 野蛮／文明の判定基準

このように、トゥーリヤ紙上でビルマ語話者にむけて「文明的なカレン」を説得的に主張するということは、仏教徒の過去を主張しそれを証明するということにほかならなかった。したがって仏教的伝統を直接・間接に証明するようなそのほかの要素も、議論の俎上に上ることになる。

諸種のカレンを区別し、タライン・カインは野蛮ではなくそもそも文明的であったという主張は、「生粋のミャンマー人」氏にさきだってカレン側からもなされていた。3 月 16 日の「カイン・ポンヂー」氏は、文明的であったことの根拠としてまず、モン族とのつながり、文字・文学の伝統をあげている。

> …でありますので、タライン・カインとタライン・ルーミョウは同じ民族でありますのは確実であります。タライン・カインの本物の文字・文学を見たいというのならば、現在タトンに住まわれているカイン・ルーミョウの僧正ヤーゼインダ師のところや、現在ヤンゴンに居住されているキリスト教徒のミスター・マンボーリンのところに行ってみますと読むことができます。これらの文字はといいますと、現代の白人の宣教師の先生が作った（カインの）文字とはたいへんに異なっているものであります。［TD 3/16　カイン・ポンヂー］

タライン（モン）・カインとタライン（モン）族は起源を一にするという主張は、ウー・ピンニャの著書にも見られるところである［池田 2009:98］。その背景には、先述の通り、ひとつにはタライン・カイン、つまりポー・カレンの分布域がモン族のそれと近接し重なっていること、そしてビルマ語話者になじみの深い伝統的なビルマ史のうえで、モンがビルマ族よりも古い上座仏教の受容者であると観念されていたことがある。この権威ある仏教の民モンとのつながり、さらに固有の文字の存在がタライン・カインに文明的な仏教徒としての過去を保証することになる。

カレンに固有の文字についての主張に対して、3 月 28 日、「マウン・ニュン」を名乗る記事が掲載され、「カイン・ポンヂー」氏がタラインとタライン・カイン、そしてタライン文字とタライン・カインの文字とされるものと混同して論じていると難じ、「ひとつの民の文字はその民の文字であり、もっと証拠を示さなければいい加減なままであろう」［TD 3/28　マウン・ニュン］と言っている。

だが、「カイン・ポンヂー」氏の主張が大きな反響を呼んだのは、文字や文学の伝統の存在ではなく、その投書の最後に付け加えた以下の一節であり、カレンに王統がかつてあったという点であった。

いにしえのカイン年代記を見ますと、カインたちはタウングー・ミョウ（城市）を統治しておりました。でありますので、カインのミン（王）たちがいたということが言えるのであります。ピュウソオディ（hpyusodhî）・ミンもまたカインであったと、あるカインの人々が言っております。でありますので、カインもまた、シャン、タライン、ミャンマーのように自主独立（komîn kohcîn）[15] であったのです。［TD 3/16　カイン・ポンヂー］

一般に、ピュウソオディは初めてのビルマ民族王朝とされるパガン朝の伝説的始祖で、『玻璃宮御年代記』ではタガウン王統の末裔、それ以前の王統記では日の神と雌龍との間に生まれた子とされる。ピュウソオディがカインであったという主張が、この後より大きな反響と反論を呼び起こしていき、わけてもヤンゴン市内のパズンダウン地区ネーシンネーダウン僧院の僧侶は5月までに4通（そして「カイン・ポンヂー」氏の投書以前の3月11日にも1通）の反論を投稿している。

3月21日、この僧侶は「タガウン王統のアディッサー王の王子である」ピュウソオディがカインであったということは「断じてなく、ミャンマー・ルーミョウであった」と強い調子で抗議し、その略史を解説している。4月11日には「ネーシンネーダウン子」の名で、タイェーキッタラ国の王統史にもカインが「乗っ取り」をかけていると憤慨し、「タイェーキッタラは（緬暦）40年（西暦598年）に始まり、29代の王がいて、その中には『カイン』という文字はまったく含まれていない」と反論する。さらに5月23日にも、もしピュウソオディがカインであるなら、「我々の（僧院教育での）ヤーザウィンの試験において、ピュウソオディのことを問題に出題し、カインの王であるとの解答を得たなら正解とすべきか否か、是非ともヤーザウィンに通暁した先生方の意見をお伺いしたいものである」と皮肉を言っている［TD 3/21; 4/11; 5/23　ネーシンネーダウン子］。このほかにも、ミャンマーの王統記に登場するテッ・ピュウ・カンヤンなどの民は今、すべてが消滅してしまったのか、そうとは考えられない、ミャンマーやシャン、タライン、カインなどの大きなルーミョウのなかにそれぞれ混ざってしまったという考え方もある、などとして、「ヤーザウィンあるいはルーミョウを研究する人々に是非とも調べてほしい」［TD 5/24　知りたい人］と、比較的冷静に歴史を検討しようという姿勢の投書も見られた。

他方、ピュウソオディがカレンであるとの主張は、カレンを自覚する論者にとってこの上もなく勇気付けられる材料であった。ウー・ピンニャの論争への参加を歓迎する文脈の中で「カインの血筋」氏は、「カイン・ルーミョウはピュウソオディから生じた偉大なルーミョウで、･･･最初に文字もヤーザウィンもあった」［TD 5/1　カインの血筋］と手放しで自賛する。つづく「カイン女性」氏も「カインの場合、ピュウソオディ・ミン（王）をそのルーミョウの王

15)「コーミンコーチン」（自主独立）は、1930年代に現われたタキン党の反植民地主義・反英闘争の党是・標語となった表現でもある［根本 1990］。以下に引用する［TD 5/13「カイン女性」］にも同様の表現が含まれるが、こちらは文脈上より直訳的な「自らの王自らの家臣」の意が強い。

であるということについて、世界の終わりまで言い尽くしたとしてもヤーザウィンに書いてあることは疑いない」[TD 5/13　カイン女性]とまで断ずる。また論争が下火になった7月に入ってからも、「カイン・ポンジー」氏は「マンダレーの碑文研究担当の大臣（cau' sa wungyi、行政官）であるミスター・トオセインコー[16]」の書物を根拠に、ピュウソオディがカレンであると再三にわたって主張している。いわく、ピュウソオディとの名はどうみてもミャンマーの名前ではない、トオセインコー氏はピュウソオディが「シャン・タヨウ（シャンの中国人、もしくは中国系シャン人）」であったとする、そしてカインの中にはシャン・カインと呼ばれる支族があり[17]、シャン・タヨウとシャン・カインの違いは「タマネーとヤーグー[18]の違いほどしかなく」、両者は同じものである、と主張している［TD 7/23　カイン・ポンヂー］。

以上のように、カレンが野蛮であるか否かという論争では、カレンにモン民族との濃厚な歴史的紐帯、固有の文字と文学、そしてなによりも王統の存在が過去にあったかということを大きな論点として、ビルマ側の反論反駁が相次ぎ、そしてカレンらの擁護と賛意が表明され、争われた。換言すれば、あるルーミョウが野蛮か否かは、過去に文字の伝統や仏教徒の王統があったかどうかという点に存するという、トゥーリヤ紙読者ひいてはこの時代のビルマ語話者の世界観のあり方を示していると言ってよかろう。この点で、ウー・ピンニャの参加と、彼による『カイン王統史』の紹介は、論争の流れに大きな転換点を与えることになった。

9. 王統の存在証明

上述のとおり、ウー・ピンニャは1月29日の論争の端緒となった投稿記事から2ヶ月あまりが経った4月8日に、編集者「都会の人」氏によって紙面上に初めて紹介された。そして4月13日にはウー・ピンニャ自身の「カイン王統史に関係したことについて」と題された記事が掲載されている。この記事は「ウー・ピンニャと呼ばれるタトン・ウー・ミャッマウン（Thaton U Myat Maung）／タトン王統史とカイン王統史（を執筆した）サヤーヂー／ヤンゴン止住（hki' tà yangon myò）」と署名され、まず、近々『カイン王統史』が出版される運びになったことについて「都会の人」氏への謝意が述べられている[19]。そして論争で問題となっているカレンに王統があったか否かについて、以下のように書き出す。

> このルーミョウには、王とともに王妃、王子、王女ら、貴臣大臣、軍隊長たち、ミョウザー（食邑）、ソオブゥー（藩王）などの宮廷のお取りまきたち（がおりましたし）、それに城壁とお濠と水路などがめぐらされてミョウ（城市）にふさわしい建築物のかずかずも余すとこ

16) 植民地期の考古学者で、著名な人物であった。
17) ここでいう「シャン・カイン」は冒頭の「ナン・セインチィ」氏のいう「タウンボー・カイン」、つまりカレンニーのことと推定される。
18) タマネーはもち米の料理、ヤーグーは雑炊のようなビルマの食べ物。
19) 既述のとおり、ウー・ピンニャの『カイン王統史』はトゥーリヤ新聞社から出版された。

> ろなく備えて、その地に統治の傘さしておりましたカイン・ルーミョウたちの王統年代記がまちがいなくありましたことを証明いたしますために、この記事を書こうと筆を執りました次第です。［TD 4/13　タトン・ウー・ミャッマウン（ウー・ピンニャ）］

これにつづいて、カイン・ルーミョウの古文書はすべて散逸してしまったのでカインの王統記がなかったと考えられてきたが、「おおよそ 25 年くらい前に」パオ・タウントゥの文字でシャンのマインカインの紙に書かれたカイン王統記に出会い、ビルマ語に翻訳したことが明かされている。こののち、この文書が２部構成になっていて第１部には王統・王宮について書かれており、ドーナ山脈ふもとのミョウハウン村近くにかつてのザヤーブーミ・ミョウの王都があって、そこではソオ・バニャーエインダテーナーヤーザー、のちのアドゥーラ王が君臨しており彼がカインであったこと、また、カインにはシャン・カイン、バマー・カイン、タライン・カインの３種があって、この文書にはタライン・カインの王統について書かれていることなどなど、のちに出版されることになる『カイン王統史』の概略がおよそ１ページにわたって具体的に縷々述べられている［TD 4/13　タトン・ウー・ミャッマウン（ウー・ピンニャ）］。

ウー・ピンニャのカイン王統史の紹介に対するカレン側の反応は、いずれも歓迎に満ちたものであった。「カインの血筋」氏は、

> 我々の民族の血、民族の精神（zatìthwê zatìman）を盛り上げるものであり、…若干の了見の狭いミャンマー人から誹謗中傷を（カインが）受けてきたさなかであったので、このようなカインの王統記があったことを示されたのはまことに喜ぶべきことだ、…実際、釈尊はどのルーミョウが王となるにふさわしくないかなどと説いたわけではなく、この世の中ではどのルーミョウも王となるにふさわしいのだ［5/1　カインの血筋］

と手放しで喜んでいる。「カイン女性」氏も、

> タトン王統記のサヤーヂィのウー・ピンニャのカイン王統記によると、カインは昔、自らの王自らの家臣（komîn kohcîn）、自らの国自らの府、自らの王都自らの大地を持って暮らしていたのだということを知ることができる［TD 5/13　カイン女性］

と誇らしげに言っている。また「カインの学校教師」氏は、

> カイン・ルーミョウの民族精神（zatìman）を称揚するもの（であり）…、カイン大王統史の第１巻、第２巻ともにビルマ語であろうと英語であろうとカイン語であろうと是非とも出版してもらいたい、…（その上で）政府の教育部門に知らしめて、英語とビルマ語に

> 翻訳のうえ、ミャンマーの（すべての）学校に、ミャンマーの王統記を補うものとして設置するよう定めてほしい［TD 5/15　カインの学校教師］

と要望している。「民族精神の鼓舞」を祝福する投書は、こののち 7 月になってからもなおも見られた［たとえば TD 7/18　クーティダラナーガラー］。

他方、ウー・ピンニャの記事が掲載された 4 月 13 日以降 20 前後の関係投稿記事が掲載されており、ビルマ側からは確認できるだけでも 7 本の投書が寄せられている。しかし、ウー・ピンニャの記事へのミャンマー側の直接的な応答は、

> カイン・ヤーザウィンを編纂したと聞くが、それは喜ばしいことだ、昔はよかったということを信じて･･･ ルーミョウの発展のために努力するのはよいことである［TD 5/17　慈悲の人］

という皮肉交じりの寸評が含まれた投書が 1 本みられるだけである。他のビルマ側の投書は、ヨーロッパ人の文明度との比較［TD 5/16　本物のミャンマー人］、ウー・ピンニャ登場以前から論ぜられていたピュウソオディの件［TD 5/23　ネーシンネーダウン子 ; TD 5/24　知りたい人、など］、当時の政治的懸案であった印緬分離問題を調査する「サイモン委員会の動向」という時事問題に関連付けて論ずるもの［TD 5/27　サンダー］などであって、一様にウー・ピンニャの記事には触れない[20]。ビルマ側論者にとっては、ピュウソオディがカインであったか否かなど、いわば各論で反論の余地を見出していたが、ウー・ピンニャが圧倒的な分量と具体的な細部をもって描写した、カイン王統が過去に存在したという総論ではすでに反駁できないほどに、ウー・ピンニャの提示した「証拠」が説得的であって沈黙せざるを得なかった、と考えてよかろう。

こののち 6 月以降、「映画とカイン」論争に関わる記事は急速に紙面から姿を消して行き、『カイン王統史』が出版される 11 月までの間、ウー・ピンニャとその「弟子」を自認する発行人マ・オウンティン（Ma Ohn Thin）らの、書籍発刊に関係した紹介記事や広告が断続的に掲載されるのみとなった［TD 5/28; 8/10　マ・オウンティン ; 11/2; 11/10　タトン・ウー・ミャッマウン（ウー・ピンニャ）］。

10. おわりに

ウー・ピンニャがその著書を出版しようと思い立った「1926 年頃の民族精神の覚醒」、そ

20) 編集部での取捨選択により、ウー・ピンニャの記事への応答が含まれたビルマ側の投書の掲載が見送られた可能性は考えられるが、こののちのビルマ側投稿者の論の傾向が似通っているところをみると、その蓋然性は低い。

してウー・ソオが指摘する「他民族によって野蛮な気質の人々だと決め付けられた」という出来事が具体的に何であったかは、現段階ではなお特定できず、さらなる史料発掘の余地が残されている。これについてはとくにYMBAやGCBA、そしてウンターヌ・アティンによる活動のなかでカレンがどのような人々として見られてきたかを検討せねばならないだろう。だが、ウー・ピンニャとウー・ソオの著書に見られたビルマにおける宗教＝王権＝民族観念のあり方、「映画とカイン」論争の展開と1920年代のカレンをめぐる社会的政治的状況などを考慮して、仏教徒著者によるカレン史2書執筆の背景として定置してみれば、仏教徒カレンがはじめてカレン民族としての声を上げた過程をおぼろながらも再構築できる。以下では本稿の結論として、論争の分析を通して浮かび上がってきたビルマ語世界の民族論理の歴史的位置付け、そして本稿の主題である仏教徒のカレン語話者の民族意識過程についてまとめ、冒頭の問いに一定の答えを出していきたい。そのうえで積み残された課題について付言したい。

まずは、仏教徒カレンの民族意識の生成過程の背面で作動していた、ビルマ世界における民族存立の論理とその変容についてである。「映画とカイン」論争は1929年前半に起こった出来事ではあったが、そこにみられる、過去における仏教的王権の有無を基準としたルーミョウ毀誉褒貶の論理は、20世紀前半のビルマにおいてある程度の普遍性を持つものであったと考えられる。このルーミョウの観念とそれにまつわる論理の変遷をよりスパンの長い射程において歴史的に位置づける作業は、また別に行わなければならない重要な今後の課題となる。ごく簡単に俯瞰すれば、ビルマ世界における民族（ルーミョウ）観念は、19世紀の植民地化に並行する王権（ミン）の没落と仏教（タータナー、清教）の衰退にともない[21)]、両者が失った価値を代替するかたちで民衆の心のうちに中心的な場所を占めていったものと考えられる［池田 2008: 88-99.］。ビルマの王朝は19世紀末の全面植民地化によって消滅したとはいえ、19世紀からの観念上の仏教＝王権の結びつきは20世紀に持ち越され、あらたに中心化したルーミョウ観念の存立を補完するという、新たな役割を得たようだ。したがってタータナーを信奉する人々にとって、「カインがルーミョウとして劣っている」、「正統ではない」、「野蛮である」とすれば、ただちに「（仏教的）王権がなかった」ということに遡及する論理が1920年代に共有されていた。

このようにタータナー＝ミン＝ルーミョウ観念の関係性を観測地点とし、1920年の「映画とカイン」論争で共有された論理の様相を歴史的に定位すれば、19世紀以来のビルマ語の世界観の変容は明らかであろう。「カインに王はいたか」と問うてそれがカレンの信仰の質を問う問題として論争化するような文脈自体は、タータナーを保証する王権がルーミョウ別に編成されていなくてはならないという、王朝時代ではありえなかった新奇な過去の規定の仕方を前

21）1885年の英国侵略によりコンバウン朝は廃され、王権を最大の施主・庇護者としていたサンガ、ひいてはビルマ仏教の衰退を招いた。衰退の認識は19世紀終わりの都市部のビルマ人仏教徒のあいだに広まり、その危機感を原動力として近代的な様相をもつ仏教復興運動が各地で形成された。1906年、各地の運動を取りまとめる連合体として青年仏教協会（YMBA）が設立された。これがのちに、ビルマ・ナショナリズム運動の嚆矢として記念されたことは既述のとおり。

提している。

2つの仏教カレン史書と「映画とカイン」論争の検討をとおしてあきらかになったいまひとつは、カレンの中では多数派と目される仏教徒によって行われた民族的な名乗りの最初期段階の一様相ということである。事後的かつ外部から「カレン仏教徒」と呼びならわされ括られることになる人々の身の上に、この時代いかなる意識変容が全体として生起していたか、どのような地域偏差を含み波及段階を経て一般化したかの点についても、別に考察し論証せねばならない事柄になる。しかし今までの検討から、おおよそ以下のような民族意識過程を蓋然性の高い仮説として描くことができるだろう。

英国植民地支配のもとでビルマ民族主義が高揚をむかえ、ルーミョウを意識する時代的空気の中で、キリスト教徒カレンの発散するイメージによってカレンは政庁協力民族なる印象を濃厚に得ていた。このような状況証拠から、カイン・ルーミョウというカテゴリー全体のイメージ低下のあおりを受けて、そこに含まれると観念されていた仏教徒カレンも、排撃とまでは行かずとも、なんらかの批判的な評価を受けていたと考えるのが妥当であろう。カインがルーミョウとして劣っているという批判は当初、キリスト教徒に向けて発せられたものかもしれない。そして、キリスト教を受け入れているということは、過去において仏教徒ではなかった、すなわち野蛮な人々であったということに結びつき、このカレンを対象とした指摘に仏教徒カレンが反応したのかもしれない。

1920年代、キリスト教徒カレンを念頭に発せられた批判に対して、カレン諸語を話す仏教徒の大部分は当初、自らもそのカレンという範疇に包摂させられていることに気がつかず、または気がついたとしても大いに戸惑ったにちがいない。彼らは、仏の教えつまりタータナーという絆を通して同じ仏教徒としてビルマ人やモン人に親近感を持っていた。キリスト教徒カレンが周囲の仏教徒との軋轢を通して常にカレンであることを確認してきたのとは対照的に、カレン諸語を話す仏教徒は、カレンというアイデンティティに依存せずとも、仏教徒、あるいは同じタータナーを信仰するという信頼感、同胞感情のゆえに自らのアイデンティティの危機に直面することはなかった。それが1920年代、期せずして同じタータナーを信奉するビルマ人から非難を受けることになったのだ。このような指摘が実は自らに向けられたものであると最初に気がついたのは、もしくはそのように信じたのは、知識人としての僧侶、ウー・ピンニャのような作家、ウー・ソオのような都市部の公務員であったろう。そして、カイン／クゥインがタータナー世界から周辺化されているという疎外感を持つに至り、反駁を試みざるを得なくなったのだ。

この反駁が、仏教徒のカレン語話者によるビルマ史上最初の民族的表明、社会的な自己主張と評価できるウー・ピンニャの『カイン王統史』であり、ウー・ソオの『クゥイン御年代記』であった。キリスト教徒カレンの社会的存在感と組織力に対して、当時、仏教徒のカレン語話者はカレンとしての社会的発言経路も組織も持ち合わせていなかった。仏教徒カレンによ

る政治団体の設立は 1939 年のビルマ・カレン民族協会（Burma Karen National Association: BKNA）が最初であり、しかもバプティスト・スゴーの助けを借りて行われたようである。だが、この反駁は、このようなカレン独自の経路を使って行われるべきものでもなかった。

それは、ビルマ語を話し「タータナーがバマー・ルーミョウやモン・ルーミョウにおいてこそ正統なものである、なぜなら王統があったから」と考えた人々に向かって、王統の存在をもってしてカインもそのような流れに正統な一員として参与していることを表明するために、ビルマ語で書かれなければならなかったからである。したがって、この反駁は王統の過去を証明する王統記の装いを必要として、キリスト教徒カイン／クゥインという「民族的同胞」には目もくれずにビルマやモンという「宗教的同胞」を優先して、そしてタータナー世界で自己完結してよかったのである。

以上の検討によって明らかになった 1920 年代ビルマの仏教徒カレンの民族意識過程の考察は、さらに広い見地に据えてみれば多方面の議論に貢献しうる可能性を持っているようにも思われる。たとえば、いままであまり論じられることのなかった、あるいは指摘はあっても具体相に分け入る研究の欠如していたビルマの諸民族の意識過程について、本研究の視点が一定の寄与を行うことができるはずだ。ビルマやモン、シャン、アラカンといった仏教的王権を過去に保持した諸民族以外で民族史が書かれ出版され始めるのはカレンと同様、この時期以降のことであり、これらの比較研究ができれば意義深い成果を期待できよう。さらに、国家を形成しえた平地の大民族の立場からは「野蛮」とされる、国家を忌避して山地を住処とした民族の歴史を論じたスコットの議論［Scott 2009］にも、本稿の主題は一定の重なりをもつ。こういったもろもろの点は今後の課題としたい。

引用文献

Aung Hla, Saw. 1939. *pgaMkaňô ali’ M taLciFsoMtêsoM* [The Karen History.] Bassein: The Karen Magazine Press.

Furnivall, John Sydenham. 1956 (1948). *Colonial policy and practice; a comparative study of Burma and Netherlands India.* New York: New York University Press.

Government of Burma. 1933. *Census of India, 1931 Volume XI Burma.* Rangoon: Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma.（"1931 Census" と略記）

池田一人 2008.『ビルマにおけるカレンの民族意識と民族運動の形成』（東京大学大学院総合文化研究科提出博士号学位論文）

————. 2009.「ビルマ植民地期末期における仏教徒カレンの歴史叙述―『カイン王統史』と

『クゥイン御年代記』の主張と論理―」『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所）第 156 冊 pp.69-140.

―――. 2012a.「ビルマのキリスト教徒カレンをめぐる民族知識の形成史―カレン知の生成と『プアカニョウの歴史』の位置付けについて―」『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所）第 162 冊 pp.77-189.

―――. 2012b.『日本占領期ビルマにおけるカレン＝タキン関係―ミャウンミャ事件と抗日蜂起をめぐって―』（Monograph Series No.11）上智大学アジア文化研究所

伊野憲治 1998.「ビルマ農民大反乱（1930 ～ 1932 年）― 反乱下の農民像 ―」信山社

大野徹 2000.『ビルマ（ミャンマー）語辞典』大学書林

Marshall, Harry Ignatius. 1922. *The Karen People of Burma: A Study in Anthropology and Ethnology.* (The Ohio State university Bulletin, Vol.16, No.13.) Ohio: the Ohio State University.

根本敬 1990.「1930 年代ビルマ・ナショナリズムにおける社会主義受容の特質 ― タキン党の思想形成を中心に」『東南アジア研究』27(4):427-447.

―――. 1999.「第 7 章 2 ～ 4 植民地下のビルマ」石井米雄・桜井由躬雄編『新版世界各国史 東南アジア史 I』山川出版社

―――. 2002.「ビルマのナショナリズムー中間層ナショナリスト・エリートたちの軌跡」池端雪浦他編『岩波講座東南アジア史第 7 巻 植民地抵抗運動とナショナリズムの展開』岩波書店

Pearn, Bertie Reginald. 1939. *A history of Rangoon.* Rangoon: American Baptist Mission Press.

Pyinnya, U. 1929. *kayin yazawin.*［カイン王統史］Yangon: thurìyà thadîzatai'

San C. Po. 1928. *Burma and the Karens.* London: Elliot Stock.

Saw, U. 1931. *kùyin maha yazawin dojî.*［クゥイン御年代記］Yangon: amyôthâ sapounhnei'tai'.

Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed; An Anarchist History of Upland Southeast Asia.* New Haven & London: Yale University Press.

Smeaton, Donald Mackenzie. 1887. *The Loyal Karens of Burma.* London:Kegan Paul, Trench & Co.

Smith, Martin. 1991. *Burma: Insurgency and the Politics of Ethnicity.* London & New Jersey: Zed Books Ltd.

Taylor, Robert. 1987. *The State in Burma.* London: C. Hurst and Company.

Thuriya Dadhinza. 1929.［The Sun, トゥーリア新聞 "TD" と略記］1929 年 1 月～ 11 月

V/25/960/44 Annual Statement of Newspapers and Periodicals published in the Province of Burma, 1926-1940. (British Library: OIOC)